

名古屋大学

訪問調査対象 プログラム名	教養教育としての海外研修プログラム
類 型	教養履修型×選択型

A. 海外プログラムの詳細

【要旨】

- 学部とは独立した国際教育交流センターが提供する教養教育としての海外プログラムである。
- 夏期と冬期にそれぞれ3つの地域の大学に学生を派遣する。期間は2～5週間まで幅があり、プログラム内容もそれぞれ異なっている。「教養教育としての海外研修プログラム」は、これら6つの海外プログラムの総称である。
- 事前学習が計8コマと充実している。2コマはオリエンテーションだが、6コマは派遣先ごとの内容に応じた事前学習を行っている。
- 講義の例として、オランダ研修では事前に30項目の目標設定を行い、事後ではその自己評価を行うとともに、グループワークでフィードバックを受ける仕組みが設けられている。

1. 教育活動、教育支援、アセスメントと対応した教育目標設定

海外プログラム個別の教育目標が明確である

SGUに採択される以前は、全学向け海外プログラムは語学研修以外ではあまり設定されていなかった。一部の部局で実施される各専門分野に特化した数が少ない海外プログラムが中心であった。フィールドワークやリサーチを含み、自分が取り組む学問が社会的にどう位置付けられるのかを知る機会を内包した海外プログラムを、専門に進む前に経験させたいという意図で、センターにて本プログラムを設けることになった。

本プログラムの教育目標は以下の通り。

1. 名古屋での授業にて、派遣国に関する一般知識、専門知識、フィールドワーク（現地調査）の方法や日本や自己についての表現（プレゼンテーション）の方法、現地語（入門）を身につける。
2. 名古屋大学の協定校において、それぞれのプログラムのテーマに沿った講義を英語もしくは現地語で受講できる力を身につける（アカデミックスキルズ）。
3. 派遣先において、名古屋からの引率・指導教員の指導を受けつつ、現地調査を体験的に実施できる力を身につける。もしくは、異文化環境、もしくは、協定校ほかの学生や研究者の前でプレゼンテーションを行う力を身につける。
4. その際、英語だけでなく現地語でも学習を行うことをめざし、世界各地の事情に偏見を

持つことなく接することができ、留学、インターンシップ、職業を通じてグローバルに活躍できる人材の育成に努める。

また、このプログラムで欧米の大学の授業を聴講することを通じ、学生に「短期間では物足りない」「もっと本格的な交換留学に行きたい」という意欲を引き起こし、次の留学へのステップとなることが意図されている。

2. 海外プログラムの実施状況とその内容

教養や英語スキルの習得にかかわる主目的のプログラムに加え、現地の学生や人々とのコミュニケーションにかかわるプログラムが明示されている

【実施時期・実施期間・実施場所・参加学生数】

実施時期	実施期間	実施場所	参加学生数
夏期	3週間	アメリカ（ノースカロライナ州）	19人
夏期	2週間	ウズベキスタン	16人
夏期	2週間	オランダ	38人
冬期	5週間	アメリカ（オレゴン州）	19人
冬期	2週間	タイ	13人
冬期	3週間	台湾	5人

【プログラムの活動内容】

本プログラムが派遣先を世界各地に多数分けている理由は、名古屋大学が世界各地に現地事務所を擁しており、それを活用するためでもある。派遣先に同大学の現地事務所が開設されていることで、フィールドワークなどでの学生のリスクマネジメントもしやすい。

また、派遣先によってプログラムの内容は様々であり、学生の多様な興味関心に対応させようとしている。本プログラムは教養科目であるため、理系学生も文系学生も参加しているが、文系学生の場合は英語力に自信がある学生が参加する傾向にあるのに対して、理系学生は英語力に自信がなくても、履修する内容に関心があると自信を持って参加する傾向が見られる。

・アメリカ（ノースカロライナ州）

ノースカロライナでは、グループで設定したテーマ（例えば、LGBT など）に沿って、現地の大学の授業を聴講し、調査を行ってグループワークをした後に発表する。本プログラムが初めての海外体験という学生や、交換留学を考えている学生の参加が多い。

・ウズベキスタン

事前に学生は自分の関心のあるテーマを設定し、フィールドワークの計画を立ててプログラムに参加する。そして現地学生の援助を受けつつフィールドワークに取り組んでその成果を発表する。

・オランダ

トゥウェンテ大学のサマープログラムに参加し、数科目を選択履修する。ボリュームは毎

日 5 コマ×9 日間。このプログラムには世界各地から 330 人程度の学生が参加するが、その 1 割以上を名古屋大学の学生が占めている。学生はキャンパスでテント生活を送ることで、費用が抑制されている。

また参加者の 3 分の 2 が理系学生であるため、IT 系などの旬のテーマ「ロボティクス」「スマートシティ」「ブロックチェーン」などを学ぶ「キュリオス U プログラム」も受講できるようにしている。

・アメリカ（オレゴン州）

SDGs に関する現地での取り組みや教育について調べたり、SDGs について学ぶ大学の授業を聴講したりする。その後、最終週には現地の学校にティーチング・アシスタントとして赴き、現場での教育を体験する。

・タイ

派遣先のチュラロンコン大学の学生とペアで、首都バンコクで日系企業を訪問したり、フィールドワークに取り組んだりする。

・台湾

午前中は派遣先の既存の中国語学習プログラムを履修する。午後は、英語で台湾の歴史や文化などを学ぶ。授業時間外や週末は台湾人学生がチューターとなって、マンツーマンで中国語を教わったり、フィールドトリップなどに参加したりする。

3. 事前・事後学習およびカリキュラム全体との関連

事前・事後学習の両方が設定されている

現地での学修に関連する事前学習のコンテンツが潤沢に用意されている

現地での学修に関連する事後学習のコンテンツが潤沢に用意されている

事前学習は各派遣先とも 8 コマを費やして行う。海外留学の意義や危機管理などのオリエンテーションが 2 コマ。残りの 6 コマは派遣先によって異なる。また、このプログラムに参加した社会人の卒業生に参加の意義や得たものについて話してもらうようなシンポジウムも行っている。

例えばオランダのプログラムの場合には、英語でのプレゼンテーション・スキルを学ぶ。また派遣先で履修する科目を登録した上で、別の内容を履修する学生でペアまたはグループを組み、その科目についての基礎知識を、ペアの相手やグループのメンバーに英語で説明するなどの事前学習が行われている。

事後学習については、派遣先ごとに報告会が開かれ、日本語または英語で全参加者が発表する。加えて、学生は渡航前に設定した 30 項目の目標について、その達成度を各自が検証するとともに、グループのメンバーと共有した上で相互評価し、自身の次の目標設定に活かしている。派遣先別の事後学習の例として、オランダのプログラムの場合には、履修した内容を、異なるプログラムを履修した学生に対して英語で説明するという取り組みを行っている。

4. 効果測定・アセスメント、カリキュラムマネジメント

プログラム設計の共有、プログラム修正機能、あるいは次年度への引継ぎ体制の何れかについて、の学内コンセンサスがとれている

事前事後のテストなどは現状では行っていない。今後は Intercultural Development Inventory (IDI) の導入を予定している。留学効果の検証については、学生に報告書を書かせてその内容の検証も行っているが、本プログラムの目標でもある交換留学への参加数や参加率を重視して検証していく方針である。

またカリキュラムマネジメントについては、担当教員が海外事務所とも協力して改善すべき点を洗い出し、次回に活かしている。具体的には、事前学習の改善などに結実している。

5. 本プログラムに参加しやすくするためのサポートや工夫

本プログラムについては、卒業必要単位として単位認定している。

JASSO の奨学金と同じ基準で、個人や法人からの寄附金による名古屋大学基金から渡航費を支給している。

また、名古屋大学では通常の保護者向け入学オリエンテーションで海外留学の説明を一部盛り込んでいるほか、海外留学のみを扱った保護者説明会も開催しており、例年は約 300 家族が参加している。

同様に同大学のユニークな取り組みとして、留学積立金制度がある。これは、学生が毎月 1 万円ずつ積み立てていくもので、途中で留学すると満額に相当する額の貸し付けを受けることができる仕組みである。

6. 本プログラム参加者の他の海外プログラムへの参加

国際教育交流センターでは、前述した入学後の海外留学説明会の開催に加えて、本プログラムの事前学習、事後学習などの機会を捉えて交換留学への参加を働きかけている。この成果として、例えば 2019 年度にオランダのプログラムに参加した 38 人のうち、10 数人が交換留学に内定している。この比率は、全学生に対する交換留学参加者数の比率を大きく上回る。

B. 学生インタビュー

1. 名古屋大学学生 1 (文学部文化人類学専攻 3 年)

(1) 入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

3 歳頃に 1 年間、父親の仕事の関係で、アメリカ・カリフォルニア州サンディエゴに家族で住んでいた。その後も、研究職に就く父親の社宅に暮らしていたが、そこには外国籍の家族が多く住んでいた。

入学前には、海外プログラムに必ず参加しようと思っていた。中学校の社会科の地理分野の授業で世界の文化について学んだ際、異文化について興味を持ったのがきっかけ。世界には様々な地域があり、気候や文化が大きく異なるということが面白く、実際に自分の目で見てみたいと思っていた。また、大学での目標が「英語を『使える』ようになること」だったので、実践の場として海外へ行きたいと思っていた。

(2) 参加した海外プログラム

2年次の春学期に、アメリカでの英語研修プログラム「米国の現代事情Ⅰ」に参加した。他の教養科目を受講した際にチラシが配られて、本プログラムの存在を知った。アメリカでの大学生活を知りたいと思い参加した。大学が開催している海外プログラムということで安心感があった。

語学の上達については、初めは期待していたが、過去にプログラムに参加した先輩から「3週間程度の渡航では短く、ペラペラ話せるようにはなれないよ」と言われていたので、あまり期待しなかった。現地では、平日の午前中から午後まで授業があり、主に英語表現を学んだ。最終日にそれぞれのテーマについてグループごとに発表をする機会が設けられていたため、授業外ではその発表に向けて、インタビューやアンケート調査を行い、その結果の集計と考察を行った。

昼食や夕食は、現地の学生と一緒に食べる約束をして、積極的にコミュニケーションをとるようにしていた。一緒に本プログラムに参加した他の学生は、日本人同士で過ごすことが多かったようだが、現地の生活を少しでも多く知りたかったことと、英語で会話をする機会を多く作りたかったことから、あえて現地の学生と交わるようにした。現地に日本語サークルがあり、その団体の厚意で、学生1人につき1人、担当のような形で現地の人がついて面倒をみてくれたことがとてもありがたかった。

(3) 事前・事後学習について

事前学習は、ノースカロライナ州についてのレクチャーが行われた。また、現地で英語を用いて会話をする練習として、英語でやり取りをする実践的な授業のほか、あいづちの練習、早口言葉の練習等、普段の英語の授業ではなかなか習わないような知識を楽しく学んだ。さらに、5~6人1グループでテーマを1つ決め、現地最終日の発表に向けて下調べ等の準備を行った。自分たちのグループは「食文化と音楽」をテーマとし、3人が食文化を、他の3人が音楽を担当した。自分は「食文化」のチームに入った。現地で食生活についてアンケートやインタビューをすることを想定し、それに向けて、調査対象は誰にするか、食生活に関連する健康問題にはどんなものがあるのか、体重別の理想的なカロリー摂取量はどれくらいなのか、といったことについてチームで話し合ったり調べたりした。前年度の本プログラムに参加した学生が、自分たちの体験をプレゼンテーションしてくれる機会もあった。過去に実際に参加した学生からの話は、参加イメージをより鮮明にでき、生活面の質問もできた

ので、大変役立った。

事後学習では、参加した感想を1分程度、日本語で発表した。言語化することで、頭の整理ができ、今後この経験をどのように生かしていくか改めて考えることができ、学びが深まった。

(4) 成長を感じる点

3歳の時以来の海外生活で不安もあったが、プログラム期間中ずっと「楽しい」と感じられ、自分は外国に長くいても大丈夫、ということが分かったことがうれしかった。

また、プログラムの事前学習～海外プログラムの期間を通して、6人1グループで1つのテーマについて調べ、最終プレゼンテーションまで行ったが、その活動を通して、リーダーシップやコミュニケーション力、課題解決力、自己管理能力などが向上したと感じた。

(5) 満足・不満足な点

満足していることは、現地で名大の先生や駐在スタッフの手厚いサポートがあり、ハリケーンや台風等のトラブルがあっても安心して生活できたことである。アメリカに到着してすぐハリケーンが来てしまい、また、帰りも日本に台風が来ていて飛行機が欠航になる等、何度かスケジュールの変更を余儀なくされたが、先生やスタッフがすぐに対応してくれて、初めての海外プログラム参加で不安があったが、実際は快適に過ごすことができた。

満足できなかったことことは、ホームステイができなかったことである。本プログラムは2人1部屋のホテル住まいであり、渡航前は、初めての海外プログラム参加ということもあり、ホームステイよりもむしろホテルのほうが安心できると思っていた。しかし、実際に渡航してみたら、意外と海外での生活が平気だったこと、海外の生活をより間近で体験してみたいと感じたことから、ホームステイ型の海外プログラムのほうがよかったと思った。

(6) 今後の学修

同じ2年次の秋学期に「欧州現代事情Ⅰ」に参加した。他地域の文化をさらに経験して、アメリカの文化と比較したくなったからである。

長期の海外留学も考えていたが、「欧州現代事情Ⅰ」に参加したことで、その必要性を感じなくなった。理由は、専門を深めていくには日本語でも十分だと感じたから。「欧州現代事情Ⅰ」では、自分の専攻分野に近い授業が現地の大学の科目のなかから2つ選ばれて聴講した。与えられた科目は「英語学」と「インド哲学」で、自身の専攻は食文化だったため興味関心は低く、内容も難しいため、英語での授業ではほとんど理解できなかった。この経験から、長期留学で文学部の知識を幅広く英語で学んでいくイメージができなくなり、専門を日本でしっかりと深めていこうと考えるようになった。

2. 名古屋大学学生2（経済学部2年）

（1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

幼少期から、ヨーロッパ・北米・オーストラリア・アジア各地への家族旅行を幾度も体験しており、現地で言葉が通じないことのもどかしさは、小さい時から感じていた。高校時代、海外からの留学生がクラスに在籍していたが、海外留学経験のある友人は英語でコミュニケーションをとっていたが、自分はあまり上手くとれなかった。こういったことから、大学に入ったらぜひ留学したいと考えていた。

大学1年次にモナシュ大学（オーストラリア）へ4週間の語学研修に参加。ホームステイ先の方が「地元ならでは」のところによく連れて行ってくれ、たくさんの人と出会い、多くの刺激を受けることができた。日本に戻ってからは刺激的なことが少なく、人と違う経験を多く積むことで自身のレベルアップが図られ、自分の成長につながると考えていることと、1年次に取ったプログラムがとてもよかったので、2年次にも留学しようと考えた。

（2）参加した海外プログラム

欧州現代事情Ⅱ・CuriousUに参加し、テーマは「English for Academic Purposes」を選択。英語で学術的内容の文章が書けるようになることが目的の授業で、選択者の多くは日本及びアジアからの参加者だった。当初は、ゲームをプログラミングする授業を選択していたが、自分の求めていたものと違うと感じ3日目にクラスを変更してもらった。変更後の担任の先生に、3日間分の授業プリントをもらい、学習の概要を教えてもらうとともに、授業後の空き時間や、テントの中（2週間の個人用テント生活）で勉強し補った。この先、海外交換留学を考えているため、大変参考になるプログラムだった。

（3）事前・事後学習について

事前学習では、安全危機管理セミナーのほか、「英語しか用いてはならない」という条件のもと、現地で学ぶ内容に関するグループワークが行われた。そこでは、自分が現地で専攻する科目についての研究をし、みんなの前でプレゼンテーションを行うとともに、自分が絶対オランダで達成してくる目標を30項目設定した。

事後学習としては、事前学習で設定した30項目に関し、それがどの程度達成できたかを自己評価すると共に、メンバーからフィードバックをもらった。現地での行動に関し、自分ではできていないと思っていた項目が、他の人からはプラスの評価をもらうなど、自分で気づいていない長所・短所を見つけることができた。その中で、ネガティブフィードバックももらったが、私が外国人に話しかける時に、いつも同じ話題でしか話しかけていないことを指摘された。確かに、政治や社会情勢、また、宗教のこと、日本のことなど、自分がもっと知識を持っていれば会話も盛り上がったと思われたシーンが思い出され、もっと幅広い教養を身につけなければと反省している。

(4) 成長を感じる点

知らない言語で会話している人たちに自分の考えを伝えることに躊躇しなくなった。イタリア語やフランス語で会話している人たちに、英語で話しかけることは当初戸惑ったが、思い切って話しかけてみると、つたない英語にもかかわらず一所懸命聞いてくれ、コミュニケーションをとることができた。また、選択コースのクラスメイト以外に多くの海外からの参加者と交流を持つため、他のクラスを選択している日本人の仲間で、各クラスから他国のクラスメイトを誘って、会話する時間を持った。授業後、本来は予習復習を行う、ナイトフェスまでの2時間くらいを用い、サウジアラビアからきた女性や、小さな国の首相クラス(?)の人など、多様な人と会話することができ、異文化対応力は格段に成長したと思う。

(5) 満足・不満足な点

プログラムそのものには、大変満足している。様々な国の人と会話することができ、サウジアラビアから参加の女性など、文化の違いに驚くとともに、自分の国のことももっと勉強しなければと痛切に感じた。また、トゥエンテ大学の学生が中心となって開催されるナイトフェスでは、多くのいろいろな国の人と会話することができ、日本のこともたくさん話すことができてよかった。

不満な点としては、オランダが想定していた以上に寒かったこと。異常気象だったようだが、最高気温が12度しかない日があるなど、日本の真冬並みの寒さだった。しかしながら、そのような中でも2週間のテント生活の中で、みんなで寝袋をもう1枚もらいに行って寝袋2枚重ねにするなど、「自分の環境は自分で変えることができる」という経験をするとともに、細かいことを気にしなくなった。

(6) 今後の学修

3年次からは、プログラミングを用いて消費者行動を科学的にとらえる、マーケティングサイエンスを研究していく予定だが、将来の夢は社長になること。そのためには経営学科での学びの他に、多くの経験をしておきたいと考えている。尊敬している経営学の教授は、海外での就労経験があり、その経験に基づいてマーケティングの授業が展開されている。海外を含めてグローバルに視野を広げて消費者行動を分析していかなければならないこと、将来起業をしたときに日本人だけにフォーカスを当てていたら上手くいかない、などのアドバイスをもらっている。こういったこともあり、日本とは違う経営学を学んでみたいと考え、日本企業があまり進出していなく、今後さらなる発展が期待できると考えているポーランドへ、3年次には交換留学したいと考えている。

3. 名古屋大学学生3（工学部3年）

（1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

入学前には海外体験も全くなく、異文化体験もなかった。入学時には海外プログラムへの参加も考えていなかった。大学院への進学も考えているが、2年生の早いうちに1カ月程度なら留年もせず、単位も取れるので、海外プログラムに参加するのもいいかなと思った。

また、海外で働くことも選択肢にあり、しっかりとアメリカのネイティブスピーカーの英語に触れておきたいと思い、このプログラムを選択した。

（2）参加した海外プログラム

名古屋大学からオレゴン大学には12人が行ったが、派遣先での内容はこの12人が1クラスとなり、3日間はサステナビリティについて学んだ。期間中には英語を学ぶための授業は組み込まれていない。まずオレゴン大学でのサステナビリティの取り組みについて見学し、次にサステナビリティのテーマについて班ごとに調べて議論し（日本語で）、それをオレゴン大学の日本語を学ぶ学生にフォローしてもらいながら英語でまとめてプレゼンする。その他に、オレゴン大学の講義を1日に2～3時間聴講した。これはお試しという感じでサステナビリティには関係ない授業だった。

また、オレゴン大学で日本語を学んでいる学生との交流は様々に行われ、ボードゲームを一緒にしたり、サステナビリティに関する映画を一緒に見たりしてディスカッションし、それをまとめてポスターセッションも行った。積雪で大学に行けない日もあったりして、それ以外に4週間の期間、何をしていたかはあまり記憶に残っていない。

（3）事前・事後学習について

事前学習は、異文化に初めて触れた時に人はどう反応するかということに関してアドラーの心理学からのレクチャーを受けた。事前学習は8コマ行われたが、他の時間の内容については記憶にない。

それ以外に、参加するにあたっての目標を30個設定し、それをグループ4人で議論したりした。海外プログラム参加中に、この目標設定に関する出来事をレポートとして書き、それを帰国後にフィードバックしてもらった。

また報告書を書くとともに、グループで振り返り、その良いところを見つけ讃え合うということも行った。

（4）成長を感じる点

成長したと感じるのは、異文化対応力。初めての海外だったが、日本と比べて想像もできないほどオープンな文化で、それに触れているうちにクヨクヨと悩まなくなった。それは帰国してからも続いており、自分の価値観が変化したのだと思う。

(5) 満足・不満足な点

楽しい思い出がたくさんできたことに満足している。満足していないのは、英語が身につかなかったこと。

(6) 今後の学修

英語力を高めて、どこかで1年間留学したい。今度は、留学先で専門を学びたいと思っている。